

北国・あひぢふじつぢ

● イッセー尾形

昨年、ロシアで、約一月半に渡り映画の撮影をしてきた。ロシア人スタッフは男性、女性、若い子も年配の人もいて、大きな家族のようだ。

監督の隣にいる大きなロシアおじさんは、でっぷりとしたお腹を突き出して座っている。立ち上げればこれまた見上げる程でかく、絵本の『大きなかぶ』に出てくるおじさんそのものだ。彼は長年、ソクーロフ監督とチームを組む照明監督である。いつも気難しい顔でカウチに腰を掛けている。「サーシャー！サーシャー！」と彼は大声で照明の若いチーフをしょっちゅう探している。眉間に皺をよせ、彼はライトの位置についてヒソヒソ声で指示を出す。サーシャは意に介せずニヤニヤと聞いている。ロシアの大男が難しい顔をしているだけで、なんだか近づくのが恐くなる。ロシア語だから聞き取れなくて当然なのだが、彼に限らずロシアの人々は内緒話をしているように話す人達のような気がしてくる。

いた彼の所へ、ヘアメイク担当の彼の奥さんがしがみ込み、彼の腕を優しく摩りながら、耳元に口を寄せて話している。彼は相変わらず無表情で彼女の話を聞いているが大きなため息をついている。僕らに気付いた彼女は「さっき監督とライトの位置で意見が合わずに落ち込んだのよ」と笑っていた。彼女はまったくね、しようがないでしょと言わんばかりに両手を広げ僕らにウインクして見せた。

東北の公演先でお世話になった蕎麦屋のご夫婦を思い出した。山の中の小さなお店で旦那さんは黙々と蕎麦を打っていた。僕らのスタッフが「観に来て下さい」と公演の招待を申し出た時、奥さんが「あら、まあ！お父さん！」と飛び跳ね、手招きするも、奥の板場からちらつとこちらを見て機嫌が悪そうに会釈をするだけの旦那さんだった。「必ず伺いますからね」と奥さんは笑顔で僕らを見送ってくれたが、ご迷惑な申し出だったのかもしれない、と思っていた。ところが、翌日、ご夫婦揃って観に来てくれた。そ

れも、公演後のロビーでは「いやーイッセーさん、すごいすなあ！寄せてもらってありがとさんでした」と興奮気味にしゃべる旦那さんの姿にびっくりしたものだ。

ロシアの大きな旦那さんも試行錯誤の上、作り上げたシーンを無事撮り終わると、「ハラシヨー！ハラシヨー！」と頬を紅潮させながら大声で近づいて来たと思ったら、満面の笑顔で僕の肩を抱き締め、なかなか放してくれなかった。



イラストレーション：栗岡奈美恵

いっせーおがた／福岡生まれ。1971年、演劇活動を始める。80年「バーテンによる12の素描」を演じ、現在の一人芝居の基となる。92年に地方公演、93年に海外公演をスタート。2004年6月、スペインの「バルセロナ・アート・フォーラム」に招待され参加。